現地ルポルタージュ

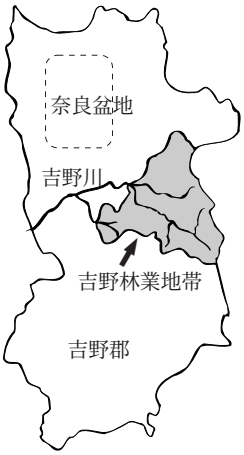
吉野林業地帯

―その伝統と現在―

吉野杉は日本の三大美林の一つとされており、吉野地域は日本の代表的な林業地帯として知られている。その吉野林業はどう形成されたのか、現在どうなっているのか、吉野林業の歴史と現状について紹介する。

一、吉野地域の概況

奈良県のうち、我々が一般に「奈良」としてイメージしている奈良盆地は、奈良県のほんの一部（面積では一割程度）を占めているに過ぎず、県の南部には広大な森林地帯が広がっている。この地域は行政区では吉野郡（三町九村で構成）にあたり、吉野郡の面積は奈良県の六割を占めるが、人口ではわずか五％を占めるに過ぎず、現在も過疎化が進行している。吉野地域は山岳宗教の修行の場となっていることに象徴されるように、全体として急峻な地形である。そのため農地は極めて少なく、大部分が森林であり（林野率は九〇％を超える）、この地域の経済は林業に多く依存してきた。



吉野地域（吉野郡）は、吉野川、十津川、北山川の三つの水系に分かれており、自動車道ができるまではそれぞれ経済圏も異なっていた。現在でも十津川地域は和歌山県の新宮市と結びつきが深い。このうち「吉野林業地帯」とは、広義にはこの吉野郡全体を含めることもあるが、一般には、吉野川流域の川上村、黒滝村、東吉野村の三村の林業地域を指している。

なお、吉野地域は都に近くかつ山深いため、時に都と対立する勢力の拠点となり、壬申の乱や南北朝の時代に歴史の表舞台に登場したが、後醍醐天皇が本陣を構え桜で有名な吉野山は吉野地域のほんの入口にすぎない。

二、吉野林業の歴史

吉野地域が有名な林業地帯となったのは、その立地条件と歴史のためである。つまり、日本経済の中心が大阪（大坂）、京都であった時代に、吉野地域は大阪に近いという立地条件のために木材供給地として早くから成長したのである。吉野地域は吉野川（和歌山県に入ると「紀ノ川」と呼ばれる）を通じて和歌山と水運でつながっており、大阪まで陸路を経ないで木材を運べた。現在のように道路やトラックが発達していない時代には、このことが非常に大きな意味をもった。

吉野地域が木材供給地として発達したきっかけになったのは、豊臣秀吉の大阪城築城であったというが、その後、酒樽用の樽丸や箸の生産が盛んになった。吉野地域では江戸時代から商人による植林が進められ、その蓄積が今日の吉野林業の基礎となっている。

さらに吉野地域が日本林業にとって意義深いのは、明治以降の日本の育林業のモデルとなったからである。明治期に吉野に土倉庄三郎という人物（大山林地主）が現れ、彼の指示によってまとめられた『吉野林業全書』は林業のバイブルとして読まれ、吉野には全国各地から視察が相次いだ。こうしたこともあり、吉野林業に関する研究も多く行われてきた（注）。

三、吉野林業の特色

吉野林業は次の様な点で日本の他の林業地帯と異なっている。

ひとつは当地区の森林の林齢が古いとい

うことである。これは吉野林業地帯の歴史の古さのためであり、吉野材の平均価格は他の地域よりはるかに高くなっている。

また、山林の所有形態、経営形態にも大きな特色がある。吉野地域で植林を行ったのは当時資力のあった奈良盆地等の商人であり、現在でも不在村地主が多い。そのため、吉野では地元の有力者に山の管理を依頼する「山守」という独特の制度が生まれた。所有と経営の分離ということができ、山守は山主から委託を受けて労働者を雇い山林の管理を行っており、山主―山守―林業労働者という三重構造が形成された。

こうした構造のためもあり、吉野地域では戦後まもなく全国で初めて山林労働組合が結成された。この組合は林業労働者の労働条件について団体協約を締結しており、吉野林業地域の林業労働賃金は全国平均より高くなっている。

吉野地域ではヘリコプターでの集材が普及している。普通、木材の搬出はワイヤーを使って林道まで運び、そこからトラックで市場まで出すが、吉野地域の地形は急峻であり、ヘリコプター集材のほうが労働災害が少ない等の理由で、現在ではほとんどがヘリコプター集材になっている。ヘリコプター集材のコストは一㎥あたり二万四千円程度であり、これ以上の材価でないと採算に乗らない。結局、そのコストに見合う材のみ出材するという構造になっており、高林齢高材価だからこそ成り立つ集材方法である（現在の全国の平均材価（スギ）は一㎥当たり一万九千円）。

四、吉野林業が直面する問題と展望

日本の育林業のモデルであった吉野林業であるが、ここでも日本林業全体が抱える困難と同じ問題に直面している。

最大の問題は林業労働力問題である。例えば、吉野林業地帯の中心である川上村でみると、一九五〇年代には一〇〇〇人近くいた林業労働者が、現在（九六年）では一八二人にまで減少している。しかも、そのうち八四％が五〇歳以上（六〇歳以上は六三％）であり、今後さらに減少する見込みである。山守制度も後継者難から維持が難しくなっている。森林組合では、こうした事態に対応して都市部から若い人を募集して林業労働者の確保を行おうとしたが、結局定着しなかったという。

吉野林業の困難が現れたものとして象徴的なのが、昨年秋の台風被害の復旧の遅れである。材価の低迷のため、倒れた木材を片づけ新たに木を植栽する意欲が森林所有者になくなっており、被害地の復旧が思うように進んでいない。それだけの費用をかけて回収できる見込みがないのである。

このように、吉野林業地帯は現在大きな曲がり角にきており、今後も日本の代表的な林業地帯として維持できるか厳しい状況にある。これだけの蓄積のある吉野林業地帯であり、銘木、磨丸太を中心に今後も一定程度は残っていくであろうが、かつてのような隆盛を期待することはもはやできないと思われる。

吉野林業が日本林業の歴史のなかで果たした役割はこれからも語り継がれるであろうし、優れた技術に支えられた「吉野」ブランドは今後も生き続けるであろう。しかし、その吉野林業の伝統を守っていくためには、その技術を受け継ぐ林業労働力の確保が緊急の課題となっている。

（注）戦後の吉野林業に関する研究の主なものをあげると、宇野弘蔵監修、東大社会科学研究所編『林業経営と林業労働』（一九五四、大内力による実態調査あり）、京大林業問題研究会編『林業地帯』（一九五六）を始めとして、笠井恭悦『林野制度の発展と山村経済』（一九六四）、野村勇編著『資本主義的林業経営の成立過程』（一九六六）、半田良一編著『日本の林業問題―紀伊半島における林業の展開構造―』（一九七九）等があり、他の林業地帯と比べて研究が盛んであった。吉野林業地帯は林業経済学者の恰好の研究対象であったといえよう。最近も、地理学者藤田佳久氏により『日本・育林業地域形成論』、『吉野林業地帯』が書かれたが、林業経済学者による本格的調査は近年あまり行われていないようである。

（清水徹朗）